

“trusteth wel, I am a southren man”

—チャーサーと「莊園管理人の話」におけるイングランド北部

岡 本 広 毅

序

一般に「英詩の父」と称されるジェフリー・チャーサー (Geoffrey Chaucer) は、〈イングリッシュネス〉を体現する作家というイメージと結び付けられやすい。とりわけ「英詩の父」という称号を支えている一つの理由は、チャーサーの一貫した英語の使用である。これは同時代のジョン・ガワー (John Gower) がラテン語、フランス語、英語という三カ国語で執筆したことを考慮すると一層意義深い。しかし、昨今のヴィクトリア朝の中世主義を含めた近代における中世研究の学問化の言説に光を当てた研究は、チャーサーと〈イングリッシュネス〉という短絡的な等号関係に批判的である。デレク・ピアソル (Derek Pearsall) は 14 世紀の時代の潮流とチャーサーの言語の選択について端的に以下のように説明している。

Chaucer's idea in using English was in any case not to assert an independent national identity but to enable England to take its place among those more advanced nations of Europe — France and Italy — that had already an illustrious vernacular. English is part of Chaucer's

European project. (“Chaucer and Englishness” 90)

つまりチョーサーが英語を用いる真意は、自国のナショナル・アイデンティティの主張ではなく、ヨーロッパの思想の潮流に自己を位置づける試みであったということである。このような汎ヨーロッパの文化的、宗教的コンテキストの中で捉えることは、エリザベス・ソルター (Elizabeth Salter) の言う “his (Chaucer’s) use of English is the triumph of internationalism” (79) という考えと共鳴している。それゆえチョーサーと〈イングリッシュネス〉の緊密な結びつきは、往々にしてチョーサーその人やその時代ではなく、ランカスター朝の言語政策やその後の歴史的受容において、特にヴィクトリア朝における中世主義的理想化の過程で醸成された概念であるとし、ピアソルは従来の言説を説得力のある口調で喝破している (77-99)。

チョーサーが常にヨーロッパ文化諸国の文芸学問の風潮を念頭に置き、著作に取り組んだことは、初期の作品がすべてラテン語やフランス語からの翻訳であったことから明らかである。代表作『カンタベリー物語』(*The Canterbury Tales*) においても大陸を視野に入れたより大きなヴィジョンが「総序の歌」から窺える。

Thanne longen folk to goon on pilgrimages,
And palmeres for to seken straunge strondes,
To ferne halwes, kowthe in sondry londes;
And specially from every shires ende
Of engelond to caunterbury they wende,
The hooly blisful martir for to seke,
That hem hath holpen whan that they were seeke. (GP. 12-18)¹

ジョヴァンニ・ボッカチオ (Giovanni Boccaccio) の記した『デカメロン』(*Decameron*) の枠物語構造に影響を受け、創作された『カンタベリー物語』は、外交使節として実際にフランスやスペイン、そしてイタリアへと赴いたチョーサーのヨーロッパ遍歴の産物と言えよう。「四月の快い霧雨が草木の乾きを満たし、人々が巡礼に憧れを抱き始める頃」、「straunge strondes」 「見知らぬ土地」、「ferne halwes」 「遠方の聖地」を求めゆく旅路はキリスト教徒としての普遍的な営みであるがゆえに汎ヨーロッパ的である。“straunge” はしばしば

作品において「異国の、見知らぬ土地の」という意味で使用されるが、ここでは異国の土地として、エルサレムやローマ、そしてスペインのサンティアゴ・デ・コンポステラといった海外の大巡礼地が想定されていたはずである。² そのような巡礼地の中でもとりわけイングランド各州に住む隅々の人々が一堂にカンタベリーへ参詣するという冒頭部分は、イングランドがヨーロッパのキリスト教文化圏に包摂された一地域であるという意識の表れである。

一方で、この「総序の歌」で浮かび上がる“*straunge strondes*”, “*ferne halwes*”という異国的性質、物理的距離に引き続き、“*specially*”「特にイングランド各地に住む人々は」と切り出す語り口は、まるでイングランド国内の地域自体が、“*straunge*”であるかのような印象を与えないだろうか。というのも、巡礼者が“*straunge strondes*”へ旅立つ一方で、イングランドの人々は異国に赴くわけではなく、国内のカンタベリー大聖堂を目指しているからである。何よりこのような叙述は、この後の巡礼者が語る物語と無関係ではない重要なテーマを示唆しているように思われる。それは多様性という観点である。主に貴族の人間がある館に集って話をする『デカメロン』と異なり、『カンタベリー物語』に登場する人物は、上は宮廷、教会を代表する聖職者・騎士から、下は召喚吏から免罪符売り、そして機織り女や農夫に至るまでほとんどすべての社会階級と様々な職業をもつ人々であり、それぞれが順々に物語を披露するというものである。ゆえに各人の話の内容も騎士道ロマンス、卑猥な滑稽譚、宗教的道德話や風刺の利いた寓話など千差万別である。そして何より特徴的なのは“*every shires ende of England*”と明示されるように、イングランド国内の広範な地域に出自をもつ人々が一堂に会するという設定である。こうした観点から本作品を考えると、「総序の歌」で言及されるこの“*straunge*”, “*ferne*”という言葉にこそ、汎ヨーロッパへの意識の表れとともに、実は自国に逆照射されたチョーサーの〈イングリッシュネス〉が表現されていると考えられないだろうか。つまり巡礼とは潜在的に“*straunge*”との遭遇であり、サザークの旅籠タバードに集いし自国の巡礼団は、イングランド人という枠組みを共有しつつも、お互いが“*straunge*”な性質を兼ね揃えた集合体なのである。そうした内なる“*straunge*”な存在との邂逅こそがこの物語の一つの主題と言えよう。

本論では、「総序の歌」において表明されたヨーロッパ文化圏を中心とした周縁としての“*straunge*”なイングランドという国の認識から実は逆説的に浮かび上がるイングランド内部の他者の問題、特に“*straunge*”という表現が頭

著に見られるイングランド北部の問題を考えてみたい。主に「莊園管理人の話」に焦点を絞り、そこに登場する北部出身のケンブリッジの学生の方言の使用と、それを披露する語り手のオズワルドという人物の地域性に着目し、チョーサーの北部意識がどのように映し出されているかを検討する。それらの考察を踏まえて、『カンタベリー物語』ではイングランド全体を巻き込む国家的な共同体を創出する試みは見られず、むしろ北部を他者とした南部意識の形成に向かっていることを論じる。

1. “Straunge” な北部

大陸諸国の見知らぬ土地をゆき、遠方の聖地に思いを馳せるという「総序の歌」に映し出された感覚は、大陸とブリテン島の間にある物理的距離ないし文化的差異と無関係ではない。ケイシー・ラヴェッツォ (Kathy Lavezzo) によると、中世におけるブリテン島はローマやエルサレムといったキリスト教文化圏の中心から見て最北西端に位置する場所で、人々は地球の臍から切り離された地理的孤立と、ある種の文化的劣等感を共有していたという (1-7)。チョーサーが「総序の歌」においてこのような意識下で “Every shires ende of Engelond” と切り出す意識の根底には、キリスト教文化圏の一部を担う辺境人としての自意識と周縁的存在としての不安が垣間見えるだろう。そしてそのような入り混じった、複雑な辺境人としてのメンタリティが自国の有り方にも投影されているに違いない。『カンタベリー物語』の中で描かれるイングランド人の中に、自国の過去や伝統を賛美し、愛国精神を鼓舞する人間が見当たらないのはこの点で示唆的である。ピアソルが述べるように、物語を語るイングランド人、そして登場人物は往々にして「不快で好ましくない連中」 “a pretty unsavoury lot” であるという印象を免れない (“Chaucer and Englishness” 90)。

そのような聞き手の感情移入を妨げるような人物たちの中でも、とりわけ「総序の歌」で示唆された物理的距離を伴う異質性が際立つのが、イングランド北部を舞台とする物語、またその地方を背景とした人物が話す物語であるように思われる。チョーサーはイングランド北部に言及する際に “fer” という言葉を多用している。例えば、*The Man of Law's Tale* の主人公コンスタンスがノーサンブリアに辿り着くと、“Fer in northhumberlond the wawe hire caste” (508) 「遠くのノーサンバランドへと波は彼女を運んだ」と表現される。

北部のヨーク出身と思われる托鉢修道士の語る *The Friar's Tale* では、“fer in the north contree” (1413) 「はるか北の地域」出身の悪魔が出没する。このようにチョーサーは自国の北部地域に対して、とりわけ地理的な隔たりを感じていたことは明白である。同時にそこに内在する精神的、文化的距離も否定できない。

一般にイングランドの北部と南部の地理的区別が明確化された要因として18世紀後半から起こった産業革命が挙げられる。産業革命によって北部は南部よりも産業、経済的發展を享受したと言われ、「スモーキーな北部」と「牧歌的南部」という認識、そして偏見が広まることとなった (Jewell 2-3)。しかし、このような北部と南部の構図は近代に由来するものではない。アングロ・サクソン時代のアルフレッド大王は、ヴァイキング襲来に伴い、イングランド本土の学問的衰退を Pastoral Care の序文で嘆いているが、特にハンバー川を南北の重要な境界線として捉えている。³ 8世紀から続いたヴァイキングの侵攻、特にアルフレッド大王の交戦の末に結ばれたデーン・ローの協定などにより、イースト・アングリア地域を含めた北東部に、スカンジナビアの言語・文化が色濃く残ることとなったのである。このような歴史的経緯を、チョーサーと同時代を生きたジョン・トレヴィサ (John Trevisa) は認識していたと思われる。サー・トマス・パークリー (Sir Thomas Berkeley) の依頼を受け、ラナルフ・ヒグデン (Ranulf Higden) の歴史書の翻訳に着手したトレヴィサは、ブリテン島内の言語状況とその地域的相違に着目した興味深い記述を残している。

... Also Englyschmen, bey3 hy hadde fram þe bygynnyng þre maner speche, Souþeron, Norþeron, and Myddel speech in þe myddel of þe lond, as hy come of þre maner people of Germania, noþeles by commyxstion and mellyng, furst wiþ Danes and afterward wiþ Normans, in menye þe contray longage ys aþeyred, and som vseþ strange wlaffyng, chyteryng, harryng, and garryng grisbttýng.

....

Al þe longage of þe Norphumbres, and specialych at 3ork, ys so scharp, slytting, and frotyng, and vnschape, þat we Souþeron men may þat longage vnneþe vndurstonde. Y trowe þat þat ys bycause þat a buþ ny3 to strange men and aliens, þat spekeþ strangelych, and also bycause þat þe

kynges of Engelond woneþ alwey fer fram þat contray; for a buþ more
 yturnd to þe souþ contray, and 3ef a goþ to þe norþ contray, a goþ wiþ gret
 help and strengthe.

þe cause why a buþ more in þe souþ contray þan in þe nouþ may be
 betre corlond, more people, more noble cytes, and more profitable
 hauenes.⁴ (下線部筆者)

トレヴィサは、アングロ・サクソン民族がブリテン島に移住して以来、南部と北部、そして中部地域のそれぞれの言語形態が存在していたことを挙げ、その理由を“commyxstion and mellyng”つまり民族間の交流、混淆の結果と考えている。デー人やノルマン人の入植とともに、言語は多様化し、“strange wlaifyng, chyteryng, harryng, and garryng grisbttyng”「どもったような、うなり声の、歯ぎしりに似た不明瞭な音」を話す人々が増えたと考察する。ここでの“strange”はMEDの2. (d)の“of language: recondite, obscure”が当てはまる。つまり「意味が不明瞭で聞きとれない」言葉を話しているということである。その後、トレヴィサが特にこの“strange”という表現をイングランド北部のノーサンブリアに結び付けている点は注目に値する。北部の中でもとりわけヨークの人が話す言葉は“scharp, slytting, and frotyng, and vnschape”「鋭く、かん高い、耳障りで不明瞭な」ゆえに、“we Souþeron men may þat longage vnneþe vndurstonde”「我々南部の人間にはほとんど理解することができない」と断言しているのである。トレヴィサは、ヒグデンの“stridet incondite”「かん高く、まとまりのない」というラテン語を“scharp, slytting, and frotyng, and vnschape”と豊富な形容詞を駆使しながらより明確且つ具体的に説明している。このような記述により、北部で使用される言語の異質性・特異性が強調されていると言えよう。その後トレヴィサはこうした理由を、王の不在という政治的事柄、また農業、商業、経済の状況と結びつけ、北部特有の事象を南部との比較を通して客観的に述べることで、“fer”という地理的距離と言語的、文化的差異を同義的に記している。

このようにトレヴィサは、イングランドの南部と北部の間に明確な境界線を設け、その差異を嘆く以上に両者の溝を深めているように思われる。これは、“we Souþeron men”と立ち位置を明らかにしているように、彼が一貫して南部の視点に立脚し、意見を述べているからである。両者の意思疎通の要因は、常に北部の“strange”な響きの言語に由来し、それゆえ南部人の耳には

“strangelich”に聞こえるのである。このように『カンタベリー物語』が執筆される頃には、イングランドにおける北と南の間には二律背反的な関係性が築かれ、とりわけ南部側のフィルターを通した北部像が定着していたと言えるだろう。

2. *The Reeve's Tale* における北部

このような南部と北部の枠組みは、イングランドを物語の舞台に設定した『カンタベリー物語』にも見られる重要な問題である。両者の構図を考える上で、『カンタベリー物語』の掉尾を飾る「教区司祭の話」に見られる次の発言は、これまで同時代の「頭韻詩の復興」というコンテキストからとりわけ物議を醸す箇所とされてきた。

But trusteth wel, I am a southren man,
I kan nat geeste – rum, ram, ruf, – by lettre,
Ne, God woot, ryn holde I but litel better; (42-44)

教区司祭は、自分は「南の人間」であるから“rum, ram, ruf”といった“geeste”「韻で物語を語ること」ができないと述べている。ノルマン・ブレイク (Norman Blake) はこの発言によってチョーサーが北西部を中心に起こったとされる「頭韻詩の復興」を意図していたと安易に解釈してはならないと注意を促している (“Chaucer and Alliterative Romances” 163-69)。しかし、チョーサーが頭韻詩で書かれた作品群を意識していたかどうかではなく、むしろここで重要なのは、未完とはいえ本作品の最終話を担当するこの教区司祭が「信頼してください、私は南の人間です」と公言する意図である。巡礼に参加した全ての人の話が終わり、最後に「南の人間なので」と締め括るしぐさは、それまでの語り手の中に紛れ込んだ「南」ではなくその反対の「北」の人間の存在を裏付けているのである。教区司祭が自らを「南の人間」としたように、それまでの話を披露した人物の中で「北の人間だから」と主張する巡礼者が見当たらないのは、チョーサーがロンドンの宮廷を中心とした役人であり、まさに教区司祭やトレヴィサのような「南部の人間」の視座・見解を共有していたからであろう。

このような観点から、「荘園管理人の話」で北部の問題がどのように取り上

げているかを検討する。この物語は、フランスのファブリオーという文学ジャンルの伝統に沿った作品で、粉屋とその家族、そしてそこにやってきたケンブリッジの学生両者の虚栄心と知略に塗れたやりとりが繰り返される。ファブリオーは主に人を笑わせるための滑稽譚であり、庶民の日常生活の断片にその笑いの主題が求められる。同じくファブリオーの「粉屋の話」において、語り手の粉屋ロビンから大工の悲惨な顛末を聞かされた莊園管理人のオズワルドは、以前大工であった自分への当てつけと解釈し、一人怒りを露わにし、それに応酬する形で話を始める。彼はケンブリッジ付近の粉屋のシムキンが、ケンブリッジの学生、アレンとジョンから屈辱的な目に合う顛末を語るのである。最終的にシムキンの大事な娘と妻が学生に寝取られ、おまけに暗闇の中で見誤った妻にまで頭を叩かれるというドタバタ喜劇、シムキンにとっては悲劇となって幕を閉じる。このように、語り手オズワルドは物語の中で粉屋シムキンの痛々しく惨めな終末を語ることで、巡礼者の粉屋に対して個人的な復讐を遂げるのである。

このようなファブリオーに特徴的なドタバタ喜劇にさらなる意味合いを与えるのが、登場人物の背景設定であり、その人物の地方色が反映された言葉使いである。本作品に登場するケンブリッジの2人の学生、アレンとジョンの会話には北方方言が散りばめられており、チョーサーはここで言わばトレヴィサが“strange”と評した北部の言葉使いの中身を具体的に記述しているのである。彼らの出自は以下のように説明される。

John highte that oon, and aleyn highte that oother;
Of o toun were they born, that highte strother,
Fer in the north, I kan nat telle where. (4013-15)

ここでケンブリッジの学生ジョンとアレンはともに“strother”と呼ばれる町で生まれたとされている。イングランド北東部のノーサンバランドにストローザーという城があることからそのあたりを指すと考えられるが、“Fer in the north”「遙か北のどこか」と正確に特定されることはない。しかしこの北方とはスコットランドではない。なぜなら学生が“by Seint Cutbert” (4127) という誓言を用いているからである。従来、意味を持たないライムフレーズとして誓言が脚韻部分に埋め合わされる場合が多いが、唯一ここで取り上げられる聖カスバートは、ダラムの聖人である。これは、北部出身の学生が用いる

のに至極適切な誓言であり、学生がイングランド北部出身であることを指し示している。

ではその方言がどのような特徴のものか、とりわけ多く用いられている箇所注目してその言語的意味合いと効果を検討する。

“By God, right by the hopur wil I stande,”
 Quod John, “and se howgates the corn gas in.
 Yet saugh I nevere, by my fader kyn,
 How that the hopur waggis til and fra.”
 Aleyn answerde, “John, and wiltow swa?
 Thanne wil I be bynethe, by my croun,
 And se how that the mele falles down
 Into the trough; that sal be my disport.
 For John, y-faith, I may been of youre sort;
 I is as ille a millere as ar ye.” (4036-45)

ここでは、北方方言が音声的 (gas, swa, sal)・語彙的 (howgates, til and fra, ille)・文法的 (gas, falls, is) に示されている。学生は、古英語の /a/ の音価が変化し /o/ と発音されるべき単語を、“swa” や “gas” のように一貫して /a/ と発音している。また “shall” が北方方言の “sal” として表記される例は 12 例見られる。文法的な面では、“gas” や “falls” に見られるように直接法三人称単数現在を示す語尾が “-th” ではなく “-s” になっている。一人称単数代名詞 “I” と、be 動詞の “is” の組み合わせも北部に見られる特徴である。⁵

ここはシムキンの悪行に対して学生たちが一泡吹かすために粉が挽かれるのを近くで観察し、あわよくばくすねてしまおうと企んでいる場面である。学生は自分たちの真意を悟られまいとし、普段の口調を維持しながら言葉を交わしているようである。しかし、その行動に違和感を覚えたシムキンは学生たちの行いを “wyle” 「悪巧み」(4047) であると察知し、彼らの “nyecetee” 「単純さ」(4046) を心の中で嘲笑いながら、密かに家の裏に回り学生が乗ってきた馬を野へ放してしまう。それに気付いた学生たちの反応は以下である。

Oure hors is lorn, alayn, for goddes banes,
 Step on thy feet! com of, man, al atanes!

...

Lay down thy swerd, and I wil myn alswa.
 I is ful wight, God waat, as is a raa;
 By goddes herte, he sal nat scape us bathe!
 Why ne had thow pit the capul in the lathe?
 Ilhayl! by god, alayn, thou is a fonne!

...

Thise sely clerkes rennen up and down
 With keep! keep! stand! stand! jossa, warderere,
 Ga whistle thou, and I shal kepe hym heere! (4073-102)

ここでは、馬を失ったことへの動揺からジョンがアレンを激しく非難する様子、そしてその馬を必死に捕まえようとする切羽詰った学生たちの模様が生き生きと伝えられる。ここでも、音声的 (banes, atanes, waat など古英語由来の /a/ の発音が保たれている)・語彙的 (capul, Ilhayl 古ノルド語の “illu heilli” が語源)・文法的 (is ここでは二人称単数 “thou” の be 動詞にも “is” が用いられている) 特徴が散見される。焦燥感に駆られ、著しく感情が高まったこのような場面では言葉を繕う余裕などなく、日常から慣れ親しんだ北方訛りが随所に飛び出していると言えよう。こうした北方方言の意義について、トールキン (J. R. R. Tolkien) は “Chaucer as a Philologist” という古典的論考の中で、豊富な用例を基に緻密な分析を行っている。トールキンは、チョーサーが “dramatic realism” を表現するために、また “private philological curiosity” ゆえに、そして “pander to popular linguistic prejudices” するために北方方言を使用したと述べ、そこで共起する笑いを意図したと説明する (110-11)。⁶

しかし一方で、チョーサーは本作品において学生に一貫して北方方言を与えているわけではないことも上記の引用から分かる。例えば、学生が “I shal kepe hym heere!” という場面があるが、それまで学生の会話の中では一貫して /sal/ と発音されていたが、ここでは一例のみ /jal/ として南部的な発音となっている。その直前の箇所 “Go” を /ga/ と発音しつつも、このひどく落ち着きを失った場面で北部出身の学生が平然と “shal” と口に出すことは、文脈からして不自然である。また上記の製粉の過程を学生が観察する場面でも、ジョンが「粉がどんな具合に入ってくるか見てみよう」という部分に “howgate” を用いているのに対し、その直後は “how” となり、アレンも “se how” と言っ

ているため、特に北方方言として一貫性は保たれていないことが分かる。また脚韻の要請から直接法現在形三人称単語語尾の“s”が“th”になっている箇所もある。⁷

このような方言の不規則性をどのように考えればいいのだろうか。理解を深めるためには、写本の問題にも触れておく必要がある。ブレイクは、ヘングジット写本では“hw-”の部分が他の写本では“qu-”になっていたり、“how”とだけ記されている部分が“howgates”となっていることを指摘している。つまりこの最もオリジナルに近いとされているヘングジット写本を写した後の写字生は、より多くの北方方言を意図的に盛り込んでいるというのである(“Non-standard language” 32-3)。トールキン以降の写本研究の発展とともに、ヘングジット写本を中心に他の写本を精査し、そこから異なる部分が多く検出されたわけである。写本によっては北部方言が故意に増やしてある場合もある。これは、チョーサーの意図を嗅ぎ分けた写字生、またチョーサーを囲むコミュニティーがそうした言語の特異性を察知し、それによって引き起こされる効果を理解していたということである(29-33)。トールキンは「写字生がチョーサーの試みをより改良しようと思ったとは考えられない」(117)という見解を持っているが、ブレイクはチョーサーにも並ぶ「写字生の能力」を考慮している。そして彼はチョーサーが熟知していたゆえに出し惜しみをしていた可能性を否定することなく、以下のような結論に至る。

However, Chaucer may have been more familiar with the northern dialects than the speech of the undergraduates suggest since he may have intended to give only a general flavour of a northern dialect so that his audience would readily understand what he included. (33)

つまり聴衆の理解を妨げない範囲において北方方言を散りばめることで、「北方的な趣、雰囲気を漂わせること」こそが、チョーサーの意向であったと考えられる。⁸ それゆえ上記の引用部分で検証したような“sal”, “howgate”となるべき箇所が“shal”, “how”として統一されていないことは意図的であり、むしろ自然であると言わねばならない。

このようにチョーサーは本作品のなかで音声・語彙・文法についての鋭い言語観察に基づき、北部方言の特徴を見事に活写したのである。学生の言葉が終始一貫したものではないにしろ、それはブレイクの言うように「北方的

な空気」を出すことにはなんら支障はない。そしてこれは本作品の主眼とも言える笑いを誘う効果と直結する。チャールズ・マスカティン (Charles Muscatine) は、チョーサー独自のこの北方方言の意義を、物語の根底に流れる喜劇的要素から考察し、粉屋シムキンの皮肉的結末を劇的に伝える手段であると解釈する。

The two clerks of Cambridge are the ones who violate the miller's vessels of "hooly blood." The irony of this sacrilege lies in the fact that throughout the tale their speech represents them to the miller as country bumpkins of no social position whatsoever. (201)

粉屋はただ女房を寝とられ、打ちのめされるのではない。どこの馬の骨かも知らないような田舎臭い野暮な響きの言葉を喋る "country bumpkin" である学生に打ち負かされる、この二重の結末にこそ、その痛烈な皮肉が込められているというのである。ピアソルも "To be tricked is bad enough, but to be tricked by such rustic buffoons is absurd" (*Canterbury Tales* 188) と、その二重の仕打ちが引き起こす不条理じみた可笑しさを汲み取っている。

3. ノーフォーク出身の語り手オズワルド

こうした喜劇性を高める巧みな方言の使用という批評家の指摘は、この物語の本質を突いていると言えよう。しかしながら、この物語の語り手である荘園管理人オズワルドという人物に注目した時、マスカティンやピアソルが考える以上のアイロニーと、単なる笑いを越えたチョーサーの北部認識の一端が垣間見える。たしかに物語中に現れる北方方言は学生の発話ではあるものの、その物語を巡礼者に語っているのが他ならぬ「荘園管理人のオズワルド」とあるという点、そしてチョーサーがそのオズワルドにその物語を語らせているという事実を重要視しないわけにはいかない。従って、本作品の北方の問題を考える際には、「ケンブリッジの学生」「荘園管理人オズワルド」「チョーサー」という三名から成る重層的な構造を吟味することが不可欠である。

では荘園管理人のオズワルドとはどのような人物であろうか。そもそもこの「荘園管理人」という身分は、地主の土地とその借地人の間に入り、地代の集金する義務を背負った役人である。「総序の歌」にはそのような職業的事

情が詳しく描かれている。

Ther nas baillif, ne hierde, nor oother hyne,
 That he ne knew his sleighte and his covyne;
 They were adrad of hym as of the deeth.
 His wonyng was ful faire upon an heeth;
 With grene trees yshadwed was his place.
 He coude better than his lord purchase.
 Ful riche he was astored prively;
 His lord wel coude he plesen subtilly,
 To yeve and lene him of his owne good,
 And have a thank, and yet a cote and hood. (603-12)

彼は“ballif”「差配人」や“hierde”「羊飼ひ」、そして“hyne”「農民」に至るまでその不正を許さず、賃料を巻き上げるので、“as of the deeth”「まるで疫病のごとく」恐れられている。⁹そして彼が大変美しい緑の木々に囲まれた生活を享受しているのは“prively”に貯蓄を増やしていたからである。領主の財産を管理する身として、自己の収入を巧みにごまかすことで資産を増やし、自分の領主よりも立派な場所に住んでいる。それでも“subtilly”に領主を喜ばせる術を知っているオズワルドは、ここで抜け目ない、したたかな策士としての顔を覗かせている。おそらくこのような狡猾で、世渡り上手な側面が大工から荘園管理人への身分的躍進を可能にしたのであろう。

このような性格の人物が本作品を語る本人であることを踏まえると、彼の物語は自身の内なる向上心が色濃く反映された物語であることに気がつく。物語に登場する粉屋のシムキンは、言わば性格上のオズワルドの生き写しである。彼らは共に瞭然たる身分差の中でいかにする賢く生き、相手を出し抜くかという思考に基づいて行動を起こしている。そもそも物語の一連の騒動は、シムキンが学寮の小麦を盗む常習犯であるがゆえに、学生は言わばその仕返しに訪れるのである。というのも彼は辺り一帯の小麦とモルトを挽く“grete sokene”「法外な独占権」(3987)を得ており、通常であれば領主に属する権利を所有しているのである。また、町の教区司祭の娘と縁組をすることで自分の“estaat of yomanrye” (3949)「ヨーマンの地位」の維持に努めている。“Yomanrye”というのは14世紀の人口の増加や移動、そして都市の発展と商

業活動の活性化から台頭してくる新興ブルジョア階級のことである。それまでの領主、聖職者、農民の固定化された三階層に割って入る新たな身分として社会の流動化の火付け役となった存在であった。ゆえに一種の成金としての地位を安定させるために手練を交えて奔走するシムキンと彼の一家には、その上昇志向と虚栄心が骨の髄まで染み込んでいる。

こうしたシムキン家の世間の中の建前を重視する姿勢を表わすものとして、物語の終盤で、娘を凌辱した学生に向かって放つ言葉は極めて重要な証言となる。

Who dorste be so boold to disparage
My doghter, that is come of swich lynage?" (4270-72)

彼は自分の大事な箱入り娘が手籠めにされてしまったそのことを嘆いているのではない。自身の高貴な血筋の娘が「学生のアレン」という身分の人間によって汚されたという事実には憤慨しているのである。つまり彼は、特に身分が問題なければ娘は犠牲にしてもよいという、道徳的基準よりも相手の家系と社会的地位を優先し、判断基準に据えているのである。このような点で、語り手のオズワルドと粉屋シムキンは極めて近似した性格を帯びている。それゆえ、オズワルドの復讐劇は自己のパロディーとしても機能し、粉屋の悲劇はある意味で自己否定という強烈な皮肉となって跳ね返ってくるのである。この物語を構成したチョーサー自身はそのような登場人物の性格と行動を揶揄しつつ、一定の距離を置いていたにちがいない。

チョーサーがオズワルドに対してある種の冷淡な眼差し向ける理由は、この人物の出自と無関係ではないだろう。チョーサーは「総序の歌」で以下のように言及する。

Of northfolk was this reve of which I telle,
Biside a toun men clepen baldeswelle.
Tukked he was as is a frere aboute,
And evere he rood the hyndreste of oure route. (619-622)

彼はノーフォークのボールズウェルと呼ばれる、特定された村の出身である。単に地方色を出すためだけにこのような特定の地域を設定する必要はないだ

ろう。ここで重要となるのは、この当時ノーフォーク地域が果たした役割とその意味合いである。東ミッドランド地域の中でもとりわけノーフォークは、13世紀から14世紀にかけてロンドンへの移住者が最も多く、織物、羊毛の主要な産地として著しい経済成長を遂げた地域であった。トマス・ガーバティ(Thomas J. Garbaty)によると、移住民はノーフォークの中でも特に“Aylsham”地域の人々が占める割合が多く、オズワルドの町であるボールズウェルはまさにその地域の村であるという(3)。オズワルドがこの村の出身であることは単なる偶然ではない。つまりこの地域の人々が、特に羊毛の貿易を軸として服地製造を生業とする職人や羊毛商人となり、ロンドンで富を築く新興階級となっていたという社会的、歴史的経緯をチョーサーは十分に察知していたと考えられる。

そうした地域の移住民の台頭、そして経済的、社会的地位の上昇は、ピアソルが述べるように、“Londoner’s contempt for parvenu immigrants” (“strangers” 51)を誘発したことだろう。特にノーフォーク地域の人間は、ジル・マン(Jill Mann)が指摘するように、早くから「狡猾で、不誠実」というイメージが根付いていたため(166)、特に成り上がり者の貪欲な姿勢は、ロンドンの人々から恨みや妬みを買う原因となったことは想像に難くない。このように考えると、上記の引用にあるように、オズワルドが“rood the hyndreste of oure route”として巡礼者一行の殿を務めているという事実は、当時のロンドン社会におけるノーフォーク移住民のある種の肩身の狭さや疎外感の反映として受け取れる。これは陽気にバグパイプを吹きながら巡礼者を先導し、町へ颯爽と繰り出す粉屋とは実に対照的である。¹⁰ 巡礼者の中でも、とりわけノーフォークのオズワルドが序列の最後尾、つまり「周縁」に位置していることは象徴的と言わざるを得ない。¹¹

このように、「周縁」に位置する人物が語る物語に、ロンドンという中心から見た言語地図における北方方言という「周縁」のモチーフが再び取り上げられるのである。チョーサーがオズワルドに北方学生の話をもたせるのは実に意図的である。この点で、オズワルドと学生の使用する言語的な一致を見逃すことはできない。何よりもこの「荘園管理人の話」はオズワルドの粉屋に対する呪詛めいた発言から逆襲の口火が切られるが、その彼自身の言葉使いに北方的響きが聞こえてくるのである。

“So theek,” quod he, “ful wel coude I thee quyte

With blering of a proud milleres ye,
 If that me liste speke of ribaudye.
 But ik am old; me list not pley for age; (3864-67)

誓言の一種の“So theek”は“then”と“ik”が縮約された形であるが、例えばこの形を免罪符売りや聖堂参事会員は“so theech”と“then”と“ic”の縮約で用いていることからその違いが明らかである。つまりここでは“ik am old”とあるように、一人称単数代名詞に北方方言の“ik”が用いられているのである。古英語期の“ic”は中英語期になると北部では“ic, ik”という形で残存したが、全作品を通じてこのオズワルドの発話にのみそれが用いられていることは意義深い。すなわち、ここで“ik”と話し始める荘園管理人に注意が集まることは疑いない。粉屋への個人的な怒りとその興奮状態が自分の地域の言葉と結びついていると言えよう。サイモン・ホロビン（Simon Horobin）は従来このオズワルドの使用する言葉に対して研究が等閑視されてきたと問題提起し、その認識の是正を促している（“Chaucer’s Norfolk Reeve” 611）。しかし、“So theek”の直後に“I”が用いられているように、常に一貫性が保たれているというわけではない。ここでもやはり、徹底した言語的配慮というよりは、「北部的な特性を匂わす、想起させる」ことが重要なのである。¹²

ノーフォークは、12世紀後半という早い時期から言語的・文化的特異性を自覚していた地域であった。リチャード・ビードル（Richard Beadle）は、各地域の写本を転写するノーフォークの写字生の翻訳態度に地域独自の言語観・言語意識の萌芽を看取する。例えば、南ノーフォーク生まれのオズボーン・ボークハム（Osbern Bokenham）という人物は、*Legendys of Hooly Wummen* の中で“…spekyn and wrytyn I will pleynty / aftyr the langage of Suthfolk speche”と述べているが、彼が翻訳言語として“Suthfolk speche”（つまりサフォーク地域の言語）を選択した事実を、地域の特異な言語認識の証拠として挙げている（92-3）。またヨークの隠者であったリチャード・ロール（Richard Rolle）の*Form of Living*という宗教的著作を転写したノーフォークの写字生トマス・バレイル（Thomas Bareyle）は、その終わりで以下のように明記している。

Here endith the informacion of Richard the Ermyte pat he wrote to an Ankyr, translate oute of Northowrn tunge into Sutherne that it schulde the betir be understandyn of men that be of the Selbe countre.¹³

ノーフォークの写字生が「北の言語を南の言語に翻訳する」という行為に、ビードルは地域特有の言語認識を読み取っている。しかしながら、ロバート・エプスタイン (Robert Epstein) は、ここで写字生がノーフォーク方言ではなく“Northowrn tunge into Sutherne”へと翻訳する意味を問い、やはり南北の軸で言語的差異を捉える傾向が強かったのではないかと疑問を呈している(112)。エプスタインの反論はビードルの例示する一部を扱ったものに過ぎないが、南部・北部の図式で捉えた場合において明らかとなるノーフォークの写字生に内面化されたある種の心性を言い当てているとも言えるだろう。

しかしながら、これまで考察してきたように、チャーサーはノーフォークの人物に対して好意的な描写を避け、ノーフォークを“Sutherne”に属する地域ではなく“Northowrn”とより親和性の高い空間として結び付けているように思われる。もちろん、オズワルド自身の方言交じりの言葉は、学生が用いる独特の北方方言を予期させる一種の導入的な役割をしたかもしれない。¹⁴ しかし、それ以上に重要なことは、チャーサーにとってはオズワルドも北部出身の学生も「内なる周縁の他者」であり、彼らが実際にその他の巡礼者とは異なる言語を用いていることである。¹⁵ この意味で、北部方言という特定できる明確な言語形態ではなく、通常言葉とは一線を画する異質な響きの言葉として、両者の近似性が先行する形で聴衆の耳に届く可能性は否定できない。なぜなら北部学生に関して言及されるのはただ「ストローゼルという村の出身」という事実のみであり、それ以外はただ“Fer in the north, I kan nat telle where” (4015)と言及されるだけで、彼らに関する正確な情報は一つ与えられていない。それゆえにこの霧に包まれたような漠然とした北部像は、語り手の意図によって様々な相貌へと変容し得るのであり、ノーフォークのオズワルドの介入によって、両者は南部とは異なる空間としてより一層戯画化され、他者化される結果となるのである。チャーサーはロンドンの社会において最も卑近ゆえに経済的成り上がり者として脅威的な存在でもあった「内なる他者」のオズワルドに北部的特性を重ね合わせることで、両者の地域的差異を南部と北部、あるいは南部でないものという二項対立的な図式に回収し、それを強化していると言えよう。

4. 南部を“Priken”する北部

以上、検証してきたことを踏まえると、この物語には次のような構図が浮

かび上がる。つまり北部出身の学生とそれを物語るノーフォークの人物が密かに共犯関係を結び、互いに結託してケンブリッジの粉屋に報復するという囲い込みの構図である。チョーサーがノーフォークのオズワルドと、北部出身の学生をその復讐の仕掛け人として組み合わせた理由は、本作品に内在する北部と南部の対立的構図とその強化を企図したからである。最後に、語り手のオズワルドと北部出身の学生とのつながりを暗示する象徴的場面を取り上げることで、北部地域を一元的に捉えるチョーサーの志向性を探りたい。

Withinne a while this John the clerk up leep,
 And on this goode wyf he leith on soore.
 So myrie a fit ne hadde she nat ful yore;
 He priketh harde and depe as he were mad.
 This joly lyf han thise two clerkes lad
 Til that the thridde cok bigan to synge. (4218-23)

ここはアレンに習い、汚名返上を心に誓ったジョンがいざ夜這いを敢行する場面である。シムキンの大事な女房を襲うシーンでは、“He priketh harde and depe”と“priken”という語彙が用いられている。ファブリオーというジャンルで最もよく使用されるのは、アレンが娘のマリンと関係を持つ場面でも使用される“swiven”「性交する」である。しかしここでは“priken”という中英語においては性的なニュアンスを喚起させない語彙が選択されている。¹⁶ つまり、この“priken”という語彙のここでの使用は不自然であると言わねばならない。ここでのこの語彙の使用には、何か隠された意図があるように思われる。

前後の文脈を詳細に検討すると、チョーサーがこの語彙の使用によって、前述の馬との対比という効果を狙っていることが明白であろう。“priken”は特に騎士道ロマンスで頻繁に用いられる語彙で、MEDの4b. (a)の定義にあるように、“Of a horse: to gallop”「馬に乗って駆ける」という行為を意味する。¹⁷ このジョンの行動は、たしかに馬と関連づけられる。シムキンは物語の序盤で学生の鼻を明かすために、水車小屋の裏手の東屋に括られている彼らの馬を野へ放つが、これは終盤の展開の伏線となっている。

He strepeth of the brydel right anon.
 And whan the hors was laus, he gynneth gon

Toward the fen, ther wilde mares renne,
And forth with “wehee,” thurgh thikke and thurgh thenne. (4062-66)

シムキンによって手綱を解かれた馬は真っ先に“wilde mares”のもとへ向かったとある。その際に“wehee”という具体的な鳴き声も伴っているが、これは発情期の鳴き声を意味する。ゆえにここでは欲情した雄馬が野生の雌馬を追いかけるという極めて性的な欲望を暗示する光景が窺える。¹⁸

シムキンのこの悪事は、皮肉にも自身の破滅への引き金となってしまう。結果的に見て、彼は屋外で馬を放したと同時に、屋内でも「学生」という馬を野放しにしたのである。学生は夜中にシムキン家の「雌馬」を急襲する「雄馬」へ変貌するからである。従って、ジョンがこの馬のイメージを纏って女房と“priketh harde and depe”する様子は、シムキンに対する辛辣な皮肉の込められた、抱腹絶倒を誘う絶妙な報復行為である。

しかし、ここで今一度語り手のオズワルドの地域の特徴を考慮した場合、さらに示唆に富む意味合いを読み込むことができる。「総序の歌」に極めて簡潔にして重要な記述が見られる。

This Reve sat upon a ful good stot
That was al pomely grey and highte Scot. (615-16)

巡礼者は皆馬に跨って旅を続けているが、このオズワルドの馬にのみチョーサーは茸毛でぶちの“Scot”という名を与えているのである。スペアリング(A. C. Spearing)によると、このスコットという名前はイースト・アングリアの一般的な馬の名称であり、これは彼がノーフォーク出身であることを補強する記述であるという。“stot”は「主に耕作用に使われる馬」を指すため、これは特にオズワルドが飼っている働き馬であり、彼が地元から連れてきている愛馬であろうと推察できる。つまりイースト・アングリア地域で名高い“Scot”に跨り、巡礼を共にしている荘園管理人のオズワルドにとって、この愛馬は自身の地域性を表わすものなのである。実際にオズワルドは前口上において、馬の比喩を多用している。

Gras tyme is doon, my fodder is now forage;
This white top writeth myne olde yeris;

...

We hoppen alwey whil the world wol pype.
 For in oure wyl ther stiketh evere a nayl,
 To have an hoor heed and a grene tayl,
 As hath a leek; for thogh oure myght be goon,
 Oure wyl desireth folie evere in oon.

...

Oure olde lemes mowe wel been unweelde,
 But wyl ne shal nat faillen, that is sooth.
 And yet ik have alwey a coltes tooth, (3868-88)

オズワルドは自身の老齡を憂う言葉として“Gras tyme is doon, my fodder is now forage”「野に草が生い茂る時期は終わった、俺の飼葉は今では干し草ばかりだ」と言い、自分の現状を馬の飼料に例えている。また彼は“yet ik have alwey a coltes tooth”「自分はまだ仔馬の歯が残っている」と訴えている。この「仔馬の歯」とは当時の慣用的な表現で、「旺盛な性欲」を意味し、ここで彼は若者にも劣らない性欲を誇示しているのである。このようにオズワルドの地元の馬に対する思い入れは、発言の節々に用いられる馬への言及によっても推し量ることができる。

一方で、そうした馬の比喻は、幾度も言及される“wil”（ここでは彼の欲望、性欲）と深く結びついている。中世を通して「馬」は人が抑制することのできない情欲のシンボルとして認識されてきたが、ここでのオズワルドの口調は、まさに年老いてなお衰えを知らない性欲の有り様を吐露するものである。このように考えると、未だになお潜在的に燻っているオズワルドの欲求が、ジョンという若駒の行為によって解放され、発散されていると言えないだろうか。つまり、ジョンがシムキンの女房を襲う場面は、実は語り手オズワルドの性的渴望が充足される瞬間なのである。その点で、さらに暗示的なのは、オズワルドの“a nail”「一本の釘」が、欲望の渦に“stick”「突き刺さっている」ことである。ノルマン・ディヴィス (Norman Davis) はこの“nail”に“snag”「突起物」という意味を与えているが、これはオズワルドの性器を示唆していると考えるのが妥当である。この“nail”が“stick”するという彼の発言に、物語の中でジョンが女房に“priken”する行為との密かな対応関係を見ることができよう。すなわち、馬を喚起させるジョンの“priken”という振る舞いには、

語り手オズワルドの地域性及び彼の内なる欲望が投影されているのである。彼は、粉屋への仕返しとして北部の出身の学生を登場させただけでなく、その報復行為の決定的場面に自己の地域的特色や、欲望を暗に重ね合わせ、何よりも自分自身の面目躍如たる一幕を作り上げたのである。このように本作品では、北部学生の背後にノーフォークのオズワルドの存在が見え隠れすることで、南部を襲う脅威的な北部というイメージが補強、強化されているのである。

結び

このように「莊園管理人の話」においてチョーサーは、北部方言を話す学生をノーフォークの人間に語らせることで、その両者の地域的差異よりも近似性を浮き彫りにし、南部と北部の対立的構図をより深める言説に寄与している。ここに「英詩の父」と称されるチョーサーに内在している北部の他者化という心性の有り様を読み取ることできる。それゆえ、物語の終わりに教区司祭が、“trusteth wel, I am a southren man”と巡礼者一同の前で自身の地域性を表明する時、そこにはチョーサーの〈イングリッシュネス〉というよりも、北部を他者とした南部人としての〈アイデンティティの自覚と誇り〉が唱えられていると言えよう。このように「総序の歌」で記されたヨーロッパの国際的文脈の中の“straunge”な辺境地としてのイングランドの諸相は、自国の北部に対するチョーサーの地域意識と、その異質性を強調する南部人としての姿勢に深く通底しているのである。

Notes

- ¹ 以下『カンタベリー物語』からの引用は全て Larry D. Benson (gen.ed.), *The Riverside Chaucer*, 3rd. ed. (Boston: Houghton Mifflin Company, 1987) による。
- ² *MED*, s. v. “straunge,” adj. 2. (a) Of a country, region, location, or geographical feature: foreign; unfamiliar, unknown, remote.
- ³ So completely was learning fallen away in England that there were very few on this side of Humber who could understand their divine service in English or translate even a letter from Latin into English; and I think that there were

not many beyond the Humber. (Burnley, 22-24)

⁴ ジョン・トレヴィサの引用は Sisam 149-50 による。

⁵ Horobin (2007) は be 動詞の “are” について、『カンタベリー物語』で使用される 4 例中 2 例が本作品中に現れることから、チョーサーが北方を意図していたと述べている (112)。

⁶ トールキンはこのような効果以上に、北方的言語の “genuine thing” を描出するチョーサーの記録・分析能力における彼のフィロロジストとしての優れた資質を称賛している。トールキンはここで自己のフィロロジストとしてのアイデンティティをチョーサーに投影していたとも考えられる。当時のフィロロジストと文学研究の関係性については、Fitzgerald を参照。

⁷ I will arise and aunte it, by my faith!

‘Unhardy is unseely,’ thus men sayth. (4209-10)

ジョンは自己を奮い立たせ、「強くないものは高貴でない」という格言を引き合いに出す。「人々が言うように」という場合の “sayth” はそれまで “says” と発音されてきたが、“fayth” の脚韻の要請からここでは “sayth” となっていると考えられよう。

⁸ Horobin (2001) もこの点に賛同している。It seems more likely that Chaucer was concerned with imposing a flavour of the Northern dialect on the students’ speech rather than achieving absolute philological accuracy or consistency. (104)

⁹ MED, s. v. “deth,” n. 6. A death-dealing epidemic, the plague; the foule deth, first deth, the Black Death [of 1348-9 in England].

¹⁰ オズワルドの目の敵である粉屋ロビンの話は、人々のによって以下のように受容される。

Whan folk hadde laughen at this nyce cas

Of absolon and hende nicholas,

Diverse folk diversely they seyde,

But for the moore part they loughe and pleyde. (3855-58)

“Diverse” な人々が “diversely” に言ったとあるように、『粉屋の話』万人に受けたのである。この “diverse” にこそ『カンタベリー物語』の主題があるとするのであれば、そこから漏れたオズワルドが最後尾に位置していることは一層示唆的である。

¹¹ オズワルド (Osewold) という名前自体も 14 世紀のノーフォークでは稀で、

むしろより北方の地域で一般的であったという。St. Oswald は7世紀のノーサンブリアの聖人である (Larry D. Benson 848を参照)。またノーフォーク (Norfolk) も語源的には、古英語の “Norþfolc” (the northern people) に遡る。

- ¹² 15世紀初頭に北方地域で書かれた中世ウェイクフィールド劇集の中の「第二の羊飼いの話」では、王の従者であると嘘をつき、南部の言葉使いを真似る羊の盗人マックが、自分のことを “I” ではなく “Ich” と呼んでいる。一人称単数の “I” の発音は、それほど南部・北部の差異を顕著に示す語であったと考えられる。詳しくは、Irace を参照。
- ¹³ この奥付に書かれた引用箇所は、ビードルも述べるように Angus McIntosh によって注意が集まった (8)。
- ¹⁴ イプスタインは学生の方言とオズワルドの訛りが全く異なるものとして現れる点で意義深いとしている (113)。
- ¹⁵ この点で、粉屋シムキンの発話に北部を想起させる要素が一切なく、南部の言葉で一貫されていることは興味深い。
- ¹⁶ MED は 4b. (g) “fig. to have sexual intercourse” の初例に 1450 年の *Ladd Y the daunce* という作品中の “Tho Jak and yc wenten to bedde; He prikede and he pransede; nolde he neuer lynne; Yt was the murgust nyt that euer Y cam ynne” の部分を引いている。しかしながら、1390 年代に書かれたとされる本作品からの引用はない。
- ¹⁷ 伝統的な騎士道ロマンスのパロディーを主題とする「トパス卿の話」の中では “He priketh thurgh a fair forest” (754) “And as he priketh north and est” (757) として用いられている。また時代は下るが、アーサー王物語を骨組みとした Edmund Spenser の *The Faerie Queene* の記念すべき第一篇の始まりは、“A gentle Knight was pricking on the plain” (1) である。
- ¹⁸ MED, s. v. “We-he,” n. The sound that a horse makes in neighing, a whinny; also, the sound or sounds associated with rutting animals [quot. c1400, 2nd]; also used as interj. or exclamation suggesting sounds of unrestrained or drunken merriment.

Works Cited

Beadle, Richard. “Prolegomena to a Literary Geography of Later Medieval

- Norfolk." *Regionalism in Late Medieval Manuscripts and Texts*. Ed. Felicity Riddy. Cambridge: D.S. Brewer, 1991.
- Blake, N. F. "Chaucer and the Alliterative Romances." *The Chaucer Review* 3 (1969): 163-69.
- . *Non-standard Language in English Literature*. London: Deutsch, 1981.
- Burnley, David. *The History of the English Language: A Source Book*. 2nd ed. London: Longman, 2000.
- Chaucer, Geoffrey. *The Canterbury Tales. The Riverside Chaucer*, 3rd ed. Ed. Larry D. Benson. Boston: Houghton Mifflin, 1987.
- . *The Reeve's Prologue and Tale with The Cook's Prologue and the Fragment of his Tale from the Canterbury Tales*. Eds. A. C. Spearing and J. E. Spearing. Cambridge: Cambridge UP, 1979.
- Davis, Norman et al, eds. *A Chaucer Glossary*. Oxford: OUP, 1979.
- Epstein, Robert. "'Fer in the north; I kan nat telle where': Dialect, Regionalism, and Philologism." *Studies in the Age of Chaucer* 30 (2008): 95-124.
- Fitzgerald, Jill. "A 'Clerkes Compleinte': Tolkien and the Division of Lit. and Lang." *Tolkien Studies* 6 (2009): 41-57.
- Garbaty, Thomas Jay. "Satire and Regionalism: The Reeve and his Tale." *The Chaucer Review* 8 (1973): 1-8.
- Holobin, Simon. "J.R.R. Tolkien as a Philologist: A Reconsideration of the Northernisms in Chaucer's *Reeve's Tale*." *English Studies* 82 (2001): 97-105.
- . "Chaucer's Norfolk Reeve." *Neophilologus* 86 (2002): 609-12.
- . *Chaucer's Language*. New York: Palgrave Macmillan, 2007.
- Irace, Kathleen. "Mak's Sothren Tothe: A Philological and Critical Study of the Dialect Joke in *The Second Shepherd's Play*." *Comitatus: A Journal of Medieval and Renaissance Studies* 21 (1990): 38-51.
- Jewell, Helen M. *The North-South Divide: the Origins of Northern Consciousness in England*. Manchester: Manchester UP, 1994.
- Lavezzo, Kathy. *Angels on the Edge of the World: Geography, Literature, and English Community, 1000-1534*. Ithaca: Cornell UP, 2006.
- Mann, Jill. *Chaucer and Medieval Estates Satire: the Literature of Social Classes and the General Prologue to the Canterbury Tales*. Cambridge: Cambridge UP, 1973.

- McIntosh, Angus. "A New Approach to Middle English Dialectology." *English Studies* 44 (1963): 1-11.
- Muscatine, Charles. *Chaucer and the French Tradition: A Study in Style and Meaning*. Berkeley: U of California P, 1957.
- Pearsall, Derek. *Canterbury Tales*. London: G. Allen and Unwin, 1985.
- . "Strangers in Late-fourteenth-century London," *The Stranger in Medieval Society*. Eds. F. R. P. Akehurst and Stephanie Cain Van D'Elden. Minneapolis: U of Minnesota P, 1997, 46-62.
- . "Chaucer and Englishness," *1998 Lectures and Memoirs. Proceedings of the British Academy* 101 (1999): 77-99.
- Salter, Elizabeth. "Chaucer and Internationalism," *Studies in the Age of Chaucer* 2 (1980): 71-79.
- Sisam, Kenneth. *Fourteenth Century Verse and Prose*. Oxford: Clarendon P, 1970.
- Tolkien, J. R. R. "Chaucer as a Philologist: *The Reeve's Tale*." *Tolkien Studies* 5 (1934; rpt, 2008): 109-71.

“trusteth wel, I am a southren man”:

Chaucer and Northern England in *The Reeve's Tale*

Hiroki Okamoto

Although Geoffrey Chaucer, usually regarded as the “Father of the English poetry”, is often considered the most canonical of authors who best embodies English identity or Englishness, it has little basis in his literary record. Recent criticism tends to demonstrate that Chaucer was more concerned with seeing himself as a member of the European literary set of his time rather than someone trying to vigorously assert his English identity. His strong identification and engagement with continental intellectualism result in *The Canterbury Tales* having a provocative prologue which unfolds with an allusion to pilgrims who seek “straunge strondes, ferne halwes, kowthe in sondry londes.” The opening lines suggest, on the one hand, his natural devotion to the universal Christian standard, but on the other hand, his implicit assumption that people “from every shires ende of engelond” is, in fact, “straunge” in nature.

Chaucer often describes the northern part of England as somewhere far-off and remote, a geographical Other. John Trevisa, a historian and his contemporary, comments that northern speech is “strange” and hardly understandable to a southern ear. He attributes the linguistic uniqueness to geographical distance, royal absence, and to the agricultural, commercial and

economical distinctiveness. His detailed observation of the north from a predominantly southern perspective is what is inherent in the Parson's declaration "trusteth wel, I am a southren man", a phrase which reveals Chaucer's idea of the northern realm. *The Reeve's Tale* is one of his fabliaux that is generally bawdy but deeply related to the question of the north. In the tale, the vileness of the proud and dishonest miller, Simkin, leads to revenge by Aleyn and John, two Cambridge students who are from the north of England. What marks this fabliau off from others is that Chaucer gives the students a touch of northern speech, which features phonological, lexicographical and grammatical variation. The northern accent and colloquialism of the two clerks not only serve as a comic representation but also reinforces the highly ironic and devastating occurrences that Simkin undergoes, emphasizing underlying Chaucer's social concern in the tale.

The fact that Chaucer has Oswald, the Norfolk Reeve, perform and imitate northern speech is highly pertinent to his own vision of the north. A number of Norfolk merchants, conventionally notorious for fraudulence and deceit, arrived as parvenu immigrants to London society in the 14th century. His background is clearly alluded to in the story through his social aspirations and his use of a similar dialect to the one the northern students in the tale use. This suggests that Chaucer, by stressing regional affinity, is attempting to homogenize Norfolk as the Other, a region that is not usually subsumed into the south. In this respect, John's act of "priken" with Simkin's wife in the climactic bedroom scene not only parallels nicely Simkin's wrongdoing of loosing clerk's horse in the field, but also resonates with Oswald's special attachment to his local horse and his sexual desire, reinforcing the idea of north-south division or conflict. Therefore, close attention to Oswald the Reeve and his narrative intentions offers us an important insight into Chaucer's way of viewing northern England.